

安曇野市まちづくり推進会議第1回ワーキンググループ 会議概要

1	会議名	安曇野市まちづくり推進会議第1回ワーキンググループ
2	日時	平成30年2月7日(水) 午後1時30分から午後4時00分まで
3	会場	豊科交流学習センター「きぼう」 2階 多目的交流ホール
4	出席者	田村会長、熊井副会長、太神副会長、増田委員、太澤委員、小松委員、海老原委員、三澤委員、小澤委員、玉井委員、望月委員、片岡委員、小口委員、重野委員、高嶋委員、一志委員、長崎委員、伊藤委員
5	担当課出席者	宮澤市民生活部長、小林地域づくり課長、山田地域づくり課長補佐、金子地域づくり課主査、中山地域づくり課主査、小笠原地域づくり課主任、奥谷地域づくり課主任、小林生活安全係長、等々力長寿社会課長補佐、瀧長寿福祉係長、小笠原障がい福祉担当係長、西澤介護保険担当係長
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	人 記者 1 人
8	会議概要作成年月日	平成30年2月20日

協 議 事 項 等

1 開会（進行：小林地域づくり課長）

2 あいさつ（田村会長、宮澤市民生活部長）

（会長）

- ・一緒にまちづくりについて考えていくのでよろしくお願ひしたい。
- ・市民と市が協働しながらいいまちづくりをしようとする際、いろいろとギャップがある。それを乗り越えて安心・安全な地域をつくるにはどうすればいいかというところでまちづくり推進会議が設置された。
- ・本日は、知識や経験、考えをお持ちの方にお集まりいただき、たくさんの意見を集約し、解決のためのワーキンググループを行う。

（部長）

- ・市区長会を中心に様々な地域課題解決へ取り組んでいるが、すべてを解決できるわけではない。まちづくり推進会議ワーキンググループでは、関連する課題に対して、経験豊富な方・専門的な知識をお持ちの方に対策を検討していただき、結果を区長会等へ戻す仕組みで、課題解決を図る。
- ・社会の流れとして人口減少、少子高齢化の傾向にあり、支え合い・助け合いが課題となってきた。市区長会では、区のあり方を示す区マニュアルやコミュニティマニュアルを作成した。コミュニティマニュアルについては、一人ひとりが主体的にできることをやり、できないことは助け合う仕組みづくりについてまとめている。コミュニティマニュアルをもとに専門部会を設け課題解決を図っているが、解決できないことをまちづくり推進会議へ提示された。
- ・区でできる課題解決は示されているので、全市的な視点から課題の解決について検討していただきたい。ワーキンググループでは、積極的に議論していただきたい。

3 自己紹介

4 「安曇野市まちづくり推進会議」及び「ワーキンググループ」について（説明：事務局）

(1) ワーキンググループの役割について

(2) ワーキンググループにおける協議事項について

※福祉グループ、安全安心グループの2つに分かれて協議することを承認。

【福祉グループ構成員】

熊井副会長、大神副会長、増田委員、大澤委員、小松委員、海老原委員、三澤委員、小澤委員、玉井委員、望月委員、片岡委員、小口委員、重野委員、高嶋委員、事務局

【安全・安心グループ構成員】

田村会長、一志委員、長崎委員、伊藤委員、事務局

5 ワーキンググループ

【福祉グループ協議事項】

(1) 市区長会による「区」の取り組み

(2) 市等による「支え合い、助け合う」制度等仕組み

※介護保険課、長寿社会課、福祉課障がい福祉担当職員より、各行政サービス、制度等について説明。

○介護保険制度の仕組みについて（介護保険課）

（課題）

- ・介護予防等、どれだけ生活支援事業等に参加いただけるか。
- ・介護保険料の上昇を抑えるために、介護予防をどう進めるか。

○高齢者福祉に関する制度、サービス等について（長寿社会課）

（課題）

- ・高齢者が増えていく中でサービスを受けていない方が多いのではないか。
- ・孤独死をなくすことはできないが、いかに早く見つけられるか。そのためには周りの方の見守りが一番大事。何げないご近所の見守りが簡単そうでできない。

○障がい者福祉に関する制度、サービス等について（福祉課障がい福祉担当）

（課題）

- ・気軽に相談できる相談支援体制の充実。児童発達支援センターを作ったが、相談だけでなく療育も兼ね合わせてやっていかなくてはいけない。また、引きこもりの支援も必要。
- ・地域で自立していくための活動の場や働く場の確保。障がい者の特性やニーズに合わせた働く場を確保していかなくてはいけない。また、就職したところに定着して仕事ができる支援も必要。
- ・地域での生活を支えるためのサービスの充実。障がいのある方が高齢化あるいは重度化してきている。また、知的障がいや精神障がいを持つ方の親が亡くなったらどうするか。サービスだけではなく、地域の見守りも必要。
- ・心のバリアフリー化。平成28年4月から障がい者差別解消法が施行された。今までは施設のバリアフリー化がメインだったが、心のほうのバリアフリー化を進めていかなければいけない。
- ・区においては地域の施設のバリアフリー化と地域のイベントへの参加促進。また、障がいの特性に応じた避難訓練の実施。聴覚障がいの方は声が聞こえないのでカードに書いてやる等の色々な方法がある。

～質疑～

(委員)

いわゆる生活困窮者はどういうところで関わっているのか。こういう問題はこれからどうするか。どうしていいのか。

(障害福祉担当)

民生委員が一番の窓口になる。最近やっているのが、こども食堂、フードバンク。社協では「マイサポ」という制度で生活困窮者の相談窓口もある。最後にどうにもならなければ生活保護という制度になる。そういう窓口を知っていただき、そこにつなげていくのがいい。

(委員)

フードドライブやこども食堂は、そういう方たちは受けたがらない人が多い。そこをもっと素直に受け入れられるように地域での声かけや思いやりの言葉をかけながら、ストレートに受け入れてもらえるようなお手伝いを地域にお願いできると、民生委員の側としてはありがたい。

～実践の課題～

(委員)

子育て支援をしているが、子育てだけでなくお年寄りと関わっていききたい。それを区にもお話ししたりしていたがなかなかできなくて、シニア倶楽部の方々が最近やっと来てくれるようになった。つながりをいかにしたらいいか。

(委員)

区ができることの中にある世代間交流だと思う。これは区で実際にやっているところが何か所かある。お年寄りの知恵をいかに引き出すかということを考えていくなれば、世代間交流という形で事業をやるのが1つかなと思う。

(事務局)

地域でのつながりは強いほうか。

(委員)

シニア倶楽部の人たちは色々活動してやっている。だから、年間計画を渡して来られるときは来てくださいとお願いしている。焼き芋をしたときは女手ではできないので、男性の方をお願いしますと言ったら2人ほど来ていただいた。少しずつでも踏み込んでいただくと、今度行き会ったときに「この間はありがとね」と笑顔で返すことができ、つながりにつながるのかなと思う。

(委員)

ケアマネージャーの立場として先日あった話。全くの独居の方で、市の緊急通報を入れて普段生活をしている。本当に具合が悪くなった時というイメージで私たちはいた。緊急通報の3番目に私のケータイを入れていて、朝6時半に安曇野市の契約されている会社から私のケータイに着信があったが、すぐ出られなかった。私からかけ直しをしたら、その方が状況を説明してくれた。実は、具合が悪くて緊急通報したのではなく、水道管が破裂して緊急通報装置を押したという。朝ドーンという音とともに、お風呂場に滝のように水が出てしまった。しまいにはガスも出なくてパニックになっているところ、緊急通報を受けた方がすぐ1番、2番、3番と連絡先に向け、南タクに連絡を取り、「すぐにドライバーが行くから心配するな」と。また、「安曇野市の担当課に一報を入れまますから安心してくれ」となだめてくれた。私が6時40分位に連絡を取ったときには市の水道課の方が行ってきていた。その前には、南タクも行ってきていて、説明の中で水道管破裂と聞いていたので、南タクの方は締める道具を持って行ってきて、すごく助かったという。私のところに着歴があってから合計20分くらいの間に迅速に対応していただいた。緊急通報装置は具合が悪い時に押しただけという感じがしていたが一新された。やはりご本人さんは一人で暮らす不安がすごくあって、例えば水道管が破裂して、それも朝自分でおろおろしているんるところに電話して

も、多分つないでいただけなかったのではないかと思うところを、緊急通報の方が迅速に、ご本人さんをなだめながら全部手配してくれて、20分後にご本人さんに電話したときには、タクシーの運転手と水道課の方が来てくれたということで、このシステムはすごいなと思った。

(長寿社会課)

先ほど3番目だと言っていたが、結構ケアマネが緊急連絡先になっている方がいらっしゃる。それがいいのか悪いのかは別として、それすらないという方もいる。やりたくても誰にしようかということで止まってしまう。その辺がどうしようかというのはある。

(委員)

一人暮らしのために入れていた通報装置が、ご本人さんにそういうことがあったにもかかわらず今日もいきいき生活できる。そういった部分につながっている。

(委員)

それぞれのセクションの心がその方に向いてくださったということがすごいこと。これが日常でできればいいなというように思う。

(委員)

つながったということがいい。

(事務局)

ただ仕組みをつくるのではなく、そういう気持ちという部分が大事。その他にどうか。

(委員)

もしかしたら区の未加入者という問題に、困難世帯の方、私たちが関わっている人たちが入っているのではないかということ初めて思うことができた。なかなか個人情報などをどこまでやり取りしていいのかということで、そこに市の方が入ってくださることによって、高齢者になる前の30歳代、40歳代、50歳代の一人暮らしの方々とか引きこもっているの方々、そういう方々に関わる方が区へ未加入であって、実は私たちはしょっちゅう会っているという方へのアプローチだったり、防災面でのつなぎ役ができるのではないかなと思う。

(事務局)

全市的に見ようというのはその部分。もっと連携すればもっとこうなるのではないかということが必ず出てくると思う。現場の皆さんの声からそういったもののヒントがいっぱい出てくる気がする。今まで皆さんが揃って踏み込んだ話というのはなかなかないと思うので、ぜひそういう議論までできればと思う。

(委員)

最近感じるのは、人はものを知らないこと。我々はこれだけのことがあるということを当然のように知っていたり事業を行っていたりする。我々が思っているよりもはるかに地域の方々は情報が入っていない。今年度、生活支援体制整備事業の一環で穂高地域在住の一人暮らし600人の方から民生委員の力を借りて聞き取り調査をし、いろんな制度やサービスを挙げて知っているか、知らないかを答えてもらった。半数以上の方が「知っている」と答えた制度やサービスは数えるほどしかない。穂高地域福祉センターという建物があることは半数以上の方が知っている。デマンド交通あづみんのことも75%以上の方が知っている。その他いろんな高齢者の方を対象にするサービスは「知っている」という回答が軒並み半数以下。健康だから知らずに来たというのも一理あるが、これがあるということを普段から知っているということが、いざという時のつながりにも直結するのかなと感じた。いかに情報を伝えていくかということも大きな課題だと感じている。

(事務局)

一般の人は本当に知らない。できれば、これを見える化したい。ただ、どういう風に整理をしていいかわからない。特に区長はこういう制度があって、何かあったときにはこうですよという形のものができるれば一番いいのかなと思っている。

(委員)

これだけの制度があることがわかり、素晴らしいと思う。これを何か1つ系統だった形で、こういう制度があるというものがそれぞれのところについていればいいのかなと思う。それともう1つ。何かあったときにどこへ話をしているのか、連絡しているのかが分かっているようでいて、案外分かっていない。結果、どこへ連絡するかと言えば市役所に電話をする。この間も、私のところに電話が来たが、私がたまたまいなかったので、市役所に電話をし、休みの日だが対応してもらったという話があった。その時に、この用事だったらここへ連絡したらいいというものが何か1つあればと考えた。松本の社協がそういうものを作って各戸に配ったということが新聞に載っていた。内容はわからないが、こういうものがあつたらいいなと思った。こういうものもこれからは必要。

(事務局)

今回は、健康推進、引きこもり、生活保護、子ども支援や学校の関係の説明の時間をいただいて、全体のことをまず知ってからということにさせていただこうと思っている。今日言えなかったこと、帰ってみて色んなことを思い浮かべることもあると思う。次回のご案内とともに今日の結果と、それぞれ所属されているところでの課題を出していただくとともに、どういうところとつながればどうなるのかというところが、もしお気づきの点があつたら、そういうのも出していただくようにさせていただきたいと思う。今回は3月の予定で行いたいと思う。本日はありがとうございました。

【安全・安心グループ協議事項】

(1) 市区長会による「区」の取り組み

(2) 市等による「支え合い、助け合う」制度等仕組み

※地域づくり課担当職員（小林課長、小林生活安全係長）より、交通安全・防犯等、安全・安心に関わる各種団体及び取組内容について説明。

～意見～

(委員)

区長在任4年間、毎年区内で交通事故があつた。事故の加害者も被害者も区民ではなかつた。広域的に考えなければならない。

(委員)

安協をやっているが、区によって安協の考え、やり方が異なっていたが、安曇野支部としてまとまってやっていくことにする。

(委員)

地域もそうだが、交通安全について学校からも課題があるのでご意見させていただき、改善につなげていきたい。

(委員)

安心安全部については、区長会として全部の区をそういったことにしたいのか。

(事務局)

区長会として部制度を進めている。83通りの形があつて良いということを経理会長は仰っている。安全安心については、各区で取り組んでいこうという方向性が出されている。

(委員)

区の中で専門部を設けるのは良いことだと思う。また、少子高齢化社会だから83区の編成も今のままで良いのかといった疑問もある。区によっては区長1人で全ての役を抱えて、市からの依頼もあり、大変であると聞く。

(事務局)

これまで、行政、警察などが区にいろんなことを依頼してきた。区の方からも「区の実情はこうだから、ここまではできるが、これは難しい」と言ってもらう中で、行政も工夫して、役割を分担できるのではないかと。「できることからやろう」と言うが、そのできることは何かといったことを考えていければ良いのではないかと。

(委員)

各取り組みの実施状況も重要だと思う。

(事務局)

交通安全対策の効果を図る尺度が難しい。

(委員)

もちろん事故ゼロだと思うが、難しい。

(事務局)

市の最低事故件数が 380 件だったので、それを目標に市はやっている。事故がゼロでなければダメだというわけではない。徐々に減らしていきたい。

(委員)

区民がいくら交通ルールを守っていても他所から来た人が事故を起こしてしまうこともある。

(事務局)

区民の意識が高くても、市内外からいろんな人が来るから難しいところがある。

(委員)

死亡事故が起きた時に検証し、例えば、右折を長くするなど改善策を考えたことがある。

(事務局)

道路改良が必要になると、時間とお金がかかってしまう。「気を付けて行ってね」など家族での声かけすることで交通安全の意識は高まる。家族を守ることから考えてもらいたい。

(委員)

当区はバス通学だが、運行路線で危険箇所があった。今年は PTA の皆さんのおかげでバスの運行路線を変更できた。みんなのアイデアでできるのは良かった。また、事故が起きる前にできたのが良かった。

(事務局)

今までの交通安全活動と視点を変えて、誰もが困らない方法で見守りができることも良い。例えば、いつもウォーキングしている人が通学時間帯に合わせてウォーキングをするなど、そういったことも見守りにつながるのではないかと。

(委員)

交通安全には特効薬がない。時間もお金もかかる。みんなが同じ気持ちで見ていると事故は起きにくいと思う。親が子どもに具体的に言い聞かせることで、防げることもあるのではないかと。危険だと言われている場所があるが、そこは逆に事故が起きない。

(事務局)

昔は近所の人に怒られたものだが、今は声をかけにくい時代である。子どものことを真剣に考えての言葉がなくなってしまったのは、残念である。ハード面は時間とお金がかかってしまうので、今できることを皆さんと考えていきたい。

(委員)

通学途中の事故は近年起きているのか。

(事務局)

事故件数は横ばいであり、ゼロではない。高齢者の事故は増えている。子どもは交通弱者なので守っていかなければならない。死亡事故は起きていないが、平成 27、28 年は 32 件事故が起きている。全体の 5～6% である。

(委員)

事故があると学校では通学路を変更するなどいろいろ考える。

(事務局)

学校も保護者に理解を得ながら、遠回りになっても、歩道のある道を通るようにお願いをしていると思う。

(委員)

先日、通学路の關係に携わった。警察では、歩道のある信号を長くして小学生が通れるようにしたようだ。

(事務局)

警察には交通の中でも規制の係があるようで、いかに子どもが安全に通れるか考えているようだ。

(委員)

スクランブル交差点が増えている。

(小林係長)

歩行者の安全には良いが、自動車の待ち時間が多くなってしまいうというデメリットもある。

(田村委員)

スクランブル交差点も増えてくれば、「こういうものか」と理解を得られるのではないか。

(事務局)

理解してもらえれば待ち時間も苦痛ではないが、何のためにあるのか分からないうちは難しい。

(委員)

警察に聞いたが、自転車はスクランブル交差点では歩いて渡る分にはスクランブルで良く、乗っているときには自動車と同じ信号で良いとのことだ。自転車はどちらの信号でも良いということだ。

(委員)

安全安心部、部制度について今一度説明いただきたい。

(事務局)

部制度の言葉の意味合いは「自分たちでできることをやろう」といったときに、今ある組織を見直して、区の組織を見直すことだと区長会から聞いている。今、安全安心部と言っているが、名称については区によっても異なるだろうと思う。現在、区では輪番制で役が回ってきて仕事となってしまうが、その人だけに任せるのではなくみんなでやっていきたいということと聞いている。

(委員)

区長会の考えは理解した。学校から危険箇所の情報があるのは事実である。私たちがどう関わっていくか。学校では青パト、地域では安協があり若い世代も安協を担っている。自分たちがいかにボランティア意識を高めて関われるかが必要だと考える。学校側にも「ボランティアとしてこういったことができないか」と提案はできると思う。

(委員)

安協役員は高齢化である。現役世代にも関わってもらいたい。同じ事業が多いので、何か良い方法があれば意見をいただきたい。

(委員)

輪番制になってしまうと、70代の方が出る場合もある。

(委員)

安協の立哨についても地域によって、毎日やる地域と1日だけの地域とがある。どちらが良いというわけではない。安曇野支部になったので、人数を減らしてPTAと協力しながら1～2回の立哨になれば負担も軽減できるのではないかと考えている。

(委員)

PTAの方は若いから一緒にやってもらえるとありがたい。

(事務局)

今ある組織を大事にしながら、活動していき、それが部制度につながることもあろうかと思う。足りないことは補いながらやれば良いのではないか。交通安全を5年担当しているが、市民の方に必要なことは何かといったものを理解していただくことは難しいと実感している。

(事務局)

本日出た意見としては、区の大小があって良いのか、事故の被害者・加害者は区民とは限らないということ、通学は区内だけを歩くわけではないのでそういった中での課題。

(委員)

雪かきについてだが、家の前は雪かきをみんなするが、その先まではなかなかやってもらえない。うちの子どもも靴を濡らして帰ってくることもある。子どもが靴を濡らさずに帰ってくるというのが理想である。

(事務局)

区の力を借りて、雪かきをしているのが現状である。

(委員)

当区ではみんなで雪かきをするが、他の区ではそうではなさそうだ。だから、そこから子どもは必死に歩いている。区に子どもがいないとなかなか雪かきをやってもらえないのかもしれない。

(委員)

昔は家の前だけでなく、自分たちが通る道の雪かきをしていた。今では、行政に丸投げしている人が多い。なので、意識改革が必要だ。当区では通学路は優先して雪かきをしている。

(委員)

当区は100%区に加入している。ただ、地域によっては50%くらいと聞いている。

(委員)

除雪はいろんな課題が浮き上がってくる。先ほどの市に丸投げする方もそうだが、区長が率先してやれば、みんな取り組んでくれる。区長が声をかければPTAも協力してくれる。

(委員)

安全安心部も加入している方がいいが、未加入の方はどうなのか。

(事務局)

未加入の問題についても安全安心を考える中で重要な課題になってくる。区をまたいだ課題もあがったので、区の外との連携も課題になってくると考える。子どもの事故は横ばいだが、高齢者の事故が増えているということなのでそういった取り組みも必要かと考える。

(委員)

小中学生を対象とした交通安全教室に呼ばれるが、敬老会からは呼ばれたことがないので、今後の課題と考える。

(事務局)

このほかにも課題があれば後日でも構わないので出していただきたい。

6 閉 会（グループごと）